

エゴーエイミであるイエス

ヨハネ福音書8:21-30

【新改訳2017】

- 8:21 イエスは再び彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜しますが、自分の罪の中で死にます。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。」
- 8:22 そこで、ユダヤ人たちは言った。「『わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません』と言うが、まさか自殺するつもりではないだろう。」
- 8:23 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは下から来た者ですが、わたしは上から来た者です。あなたがたはこの世の者ですが、わたしはこの世の者ではありません。」
- 8:24 それで、あなたがたは自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。わたしが『わたしはある』であることを信じなければ、あなたがたは、自分の罪の中で死ぬことになるからです。」
- 8:25 そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれなのですか。」イエスは言われた。「それこそ、初めからあなたがたに話していることではありませんか。」
- 8:26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わされた方は真実であって、わたしはその方から聞いたことを、そのまま世に対して語っているのです。」
- 8:27 彼らは、イエスが父について語っておられることを理解していなかった。
- 8:28 そこで、イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げたとき、そのとき、わたしが『わたしはある』であること、また、わたしが自分からは何もせず、父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していたことを、あなたがたは知るようになります。」
- 8:29 わたしを遣わした方は、わたしとともにおられます。わたしを一人残されることはありません。わたしは、その方が喜ばれることをいつも行うからです。」
- 8:30 イエスがこれらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた。

(8:24)ギリシャ語・英語／行間訳

εἶπον οὖν ὑμῖν ὅτι ἀποθανεῖσθε ἐν ταῖς ἀμαρτίαις ὑμῶν ἕαν γὰρ μὴ
I said therefore to you that you will die in the sins of you; for if you
πιστεύσητε ὅτι ἐγώ εἰμι, ἀποθανεῖσθε ἐν ταῖς ἀμαρτίαις ὑμῶν.
believe not that I am, you will die in the sins of you.

【NKJV】 "Therefore I said to you that you will die in your sins; for if you do not believe that I am He, you will die in your sins."

【祈りながら考えよう】

- (1) 人がキリストを捜し求めても無駄に終わるといことがあり得ますか。
- (2) 24節で、イエスをご自分がどんな方であると語っていますか。ギリシャ語（エゴーエイミ）の意味を説明して下さい。
- (3) 28節でイエスの死後（人の子を上げた時）、ユダヤ人たちは「イエスがどんな方であるか」を知るようになると言われましたか。

【解説】

(1) キリストを捜し求めても無駄に終わるといことがあり得る

主イエスは、不信のユダヤ人に「あなたがたはわたしを捜しますが、自分の罪の中で死にます。」と言われた。この言葉で主が言おうとされたのは、ユダヤ人たちはやがて主を捜し求めるが無駄に終わる、ということである。主イエスのように愛に満ち、人を救うことに熱意を持っておられる救い主であっても、尋ね求められて「無駄に」終わることがある、とは 思うも悲しいことである。しかし、実際そうなのである！ 人はキリストについて多大の宗教的感情を持ちながら、救いに至る信仰心を持たないことがあり得る。

病気・突然の不幸・死への恐れ・慰めのもとであるものを失った時、これらの不幸な出来事は、人に多大の「信仰心」を引き起こすかもしれない。これらが原因で、人は熱心に祈りを唱え、熱烈な霊的感情を示し、一時的に「キリストを尋ね求めること」を告白し、一変した人間になることがあるかもしれない。それに関わらず、その間中、そ

の心の奥底は少しも動かされていないかもしれない。彼を動かしていた特別な事情が取り除かれれば、普通の生き方へと戻ってしまう。その人はキリストを尋ね求めたが「無駄なしかたで」あった。なぜか。彼はキリストを誤った動機から尋ね求めていたのであって、全き心からではなかったからである。

聖書が証しているのは、人は神を拒絶して、ついには神がその人を拒絶されその祈りを聞こうとされなくなるまでに至る、ということが起こり得るということである。

良心の光を消し続け、神がお与えになった正しい知識に反発した結果、ついには、神が彼らにそれを与えるのを阻まれ、彼らを無一物にしてしまわれる、ということが起こり得る。

次の言葉が記されているのは、ゆえなきことではない。「そのとき、わたしを呼んでも、わたしは答えない。わたしを捜し求めても、見出すことはできない。それは、彼らが知識を憎み、主を恐れることを選ばず、わたしの忠告を受け入れようとせず、わたしの叱責をことごとく侮ったからだ。」(箴言1:28-30)。こういうケースは、よくあることではないかもしれない。しかし、それらはあり得るのであり、時折は見かけられるものなのである。

(2) わたしがエゴーエイミであることを信じなければ罪の中で死ぬ

主イエスが、「わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません」と言われると、ユダヤ人の指導者たちは、それでは「自殺するつもりではないのか」と嘲笑った。当時、ユダヤ人は、自殺を人殺しと同様、モーセの十戒を破るものと考えていた。それに対して、主はこう言明された。

「あなたがたは下から来た者ですが、わたしは上から来た者です。あなたがたはこの世の者ですが、わたしはこの世の者ではありません。それで、あなたがたは自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。わたしが『わたしはある』であることを信じなければ、あなたがたは、自分の罪の中で死ぬことになるからです」(23-24節)

ここで主は、はっきりご自分が普通の人間ではないことを語っておられる。「上から」とは「天から」という意味であり、「下から」とは「この世から」という意味である。

聖書が、「天」とか「上」と言う場合、また「世」とか「下」という場合、決して単なる場所的な上下のことではない。神の御座である「天」と、罪の満ち満ちたこの世のことであって、聖い所と、罪の満ち満ちた所を意味する。

だから、「上から」来たとは神を意味し、「下から」とは「この世の者」、つまり人間を意味する。人類は先祖アダム以来、罪を持った存在であるから、「自分の罪の中で死ななければならない存在」である。

しかし、主イエスは違う。この世界の造り主の神であられる。24節で、「わたしはある」と訳されている言葉は、ギリシャ語（エゴーエイミ）で、そういうことを意味している。それは昔、神がモーセに自らをあらわされた際の神の御名である（出エジプト3:14）。イザヤ書43章10-11節にある神の自己顕現のことばはそのように訳されている。

「これは、あなたがたが知って、わたしを信じ、わたしがその者であることを悟るためだ。わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にも、それはいない。わたし、このわたしが主であり、ほかに救い主はいない。」

イエスが、旧約聖書に啓示されたこのような神であるとすれば、彼を信じないことは確かに致命的である。

(3) イエスの死後に知るようになる

ユダヤ人たちは、イエスの途方もない主張に当惑して、そんなことを言う「あなたはだれなのですか」と質問した。これに対してイエスは答えられた。

「あなたがたが人の子を上げたとき、そのとき、わたしが『わたしはある』であること、また、わたしが自分からは何もせず、父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していたことを、あなたがたは知るようになります」と言われた。

イエスは改めて、これから起ころうとすることを預言された。ユダヤ人が人の子を上げる、というのである。これは十字架刑によってイエスが死を遂げられることを指す。イエスを十字架で処刑した後に、指導者たちは初めて、イエスがだれであったのかが分かるというのである（マタイ27:51-54:百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たちは地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。「この方は本当に神の子であった」/マタイ28:11-15:番兵たちが何人か都に戻って、起こったことをすべて祭司長たちに報告した。そこで祭司長たちは長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。「弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った」と言いなさい。…）。

百人隊長や主の復活の報告をもみ消そうとした祭司長たちは、もう遅すぎる時になって、彼らは主が誰であるかを知った。主の言葉を注意深く見てみよう。

「そのとき、わたしが『わたしはある』(エイゴーエイミ)であることを知るだろう。

この背後の意味は「その時、あなたがたは、わたしが神であることを知るようになるだろう」ということである。

イエスが人間以上の存在であること、神から遣わされ、神と一体の方であることを人々が悟るのは、イエスの死後である。「子」であるイエスは「父」によって遣わされた者であること。

そしてイエスと「父」が一体であること。特に、ヨハネ福音書は「わたしはある」(エイゴーエイミ)と、自らの神性を示唆するイエスを繰り返し言及する。

イエスの語ることの真意は、彼らに伝わらなかった。もし伝わっていたならば、安易に「信じる」とは言わなかったであろう。しかし、彼らの多くはその浅薄な理解に基づいて信じるという態度を表した、と福音書記者は記している。「イエスがこれらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた。」(30節)

